

## 唐 成(トウ セイ)

中国出身／1998-1999 年度奨学生

筑波大学 社会科学研究科 博士課程修了

博士号(経済学)取得後、現在は中央大学経済学部教授として教鞭を執りながら、日中両国の架け橋として尽力されている唐成さんに、ご自身の半生記をご寄稿いただきました。

### 私の半生記

1991 年 4 月に私は留学のため来日し、すぐに小さな焼鳥屋でアルバイトを始めた。そのときの時給は 1,500 円で、時々お客さんからチップやお釣りをもらえ、私なりにバブル期の日本経済を実感した。日本はなぜこんなに繁栄しているのだろうかとの思いから、日本経済に関心を持ち、日本での経験を中国経済の発展に生かしたいと考えようになった。

2年間日本語などを習い、1993 年 4 月に筑波大学社会学類に入学した。同学年の留学生は私 1人だったが、同級生から「タンツェン」と呼ばれ、勉強やアルバイト、遊びなど皆親しくしてくれた。

せっかく留学したので、1997 年に私はさらに大学院へ進学した。入学後間もなく、恩師の酒井泰弘先生は「君たちはいま暗いトンネルの中にいる。ひたすら出口の明かりに向かって学問に励みなさい」「どんな研究領域でも、“その先端に唐成君がいる”と評価されれば、君は成功者だ」などと語られた。学者として目指すべき道を指し示してくれた教えは今でも忘れることはない。リスク研究の第一人者である酒井先生を道標に、ひたすらその道を走るいまの自分が在る。

酒井先生のアドバイスもあって、私は「家計貯蓄」を研究テーマとした。しかし、大学院での 5 年間は、まさに暗いトンネルのなかでの孤独と、将来の不安と闘いながらの地道な研究生活であった。しかし、坂口財団等の奨学金に支えられた研究生活は、また幸せそのものである。研究の辛い

時には、勉強机の上にはずっと置いてある坂口美代子 代表理事のお便りをみると「努力するぞ」と勇気付けられる。2002 年、順調に博士号が取れたものの、すぐにはポストが決まらなかった。学生結婚だったので、男として早く自立したい気持ちはあった。しかし、心の声に耳を傾けると、研究者になりたい気持ちを断念するできなかつた。

2002 年秋に、兄の友人からの貴重な募集情報をもとに慶應義塾大学総合政策学部で任期付き講師のポストを得、私は中国語による中国経済の講義を担当し、翌年には日中経済のゼミも持つようになった。ゼミの研究成果を 2005 年の全日本証券ゼミナール大会で発表し、プレゼン部門で優勝、『中国の貯蓄と金融一家計、企業と政府の実証分析』(慶應義塾大学出版会)も刊行した。同年、長男が生まれ、2006 年には桃山学院大学経済学部へ助教授として転任した。

その後、2014 年度に中央大学経済学部の教授として赴任することになった。妻もまた私の都合に合わせて東京本社に転勤させてもらえたので、引越しを準備することになった。しかし、気に入った賃貸物件は「外国人には貸さない」とオーナーに断られた。自分は 4 月から中央大学の教授になるし、保証人も早稲田大学の教授だからと「信用力」で再度勝負に出たが駄目だった。

そのショックは数日間続いた。思い起こせば、日本に来た当初からこのようなことにずいぶん苦勞をさせられた。しかし、20 年後に再び差別されることになるとは夢にも思わなかつた。日本社会には、依然として外国人差別の問題が根強く存在し

ていることを改めて思い知らされた。私の周りは、親切な日本人ばかりゆえに、なおさら残念でたまらなかった。

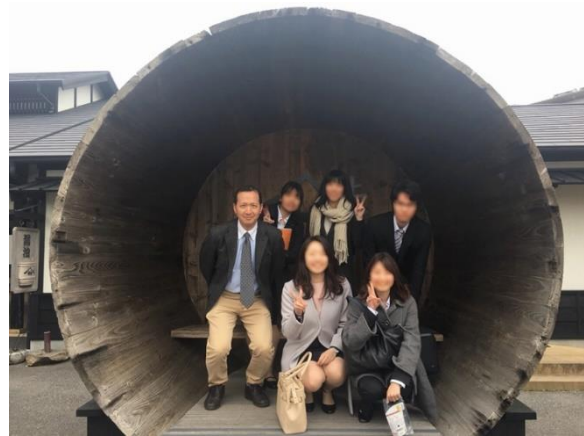
中央大学で私はゼミ教育に力を入れようと決めていた。それは教育者としてだけでなく、自分なりの日本社会への恩返しと思ったからである。初年度にゼミ生 4 名でスタートしたが、いきなり学部プレゼン大会で準優勝を獲得した。その効果か、翌年のゼミ応募数が増え、私はある学生に「日中関係が悪いのに、君はなぜ唐ゼミを希望したの?」とわざと聞いてみた。学生は「日中経済は切っても切れない関係なので中国経済を学びたい」と答えてくれた。「なるほど!」経済学部での自分の立ち位置を見つけた瞬間だった。

そこから、毎年夏休みにゼミ生を連れて、上海フーズビリティ・スタディ(実現可能調査)を実施するようになった。もちろん、私自身もやりがいを感じている。ある年に入試センターから依頼され、高校に出前講座に行った。高校側の了解を得て、講座の後半にゼミ生の一人がゼミ研究を発表した。ある高校生は彼に「初めて上海に行って、どうでしたか?」と質問すると、彼は両手で、「メディアで報道している中国はこのような小さな○で、実際上海に行って中国はこのような大きな○だったことがわかり、行ってよかった」と返答した。私はゼミ生にありのままの中国を見て欲しかったので、彼らが自らの中国体験を率直に語るの嬉しかった。

その意味では、日本のインバウンドも経済効果に留まらず、日中間の民間レベルの相互理解と平和の促進にも大いに役立つ。日本に良い印象を持っていなかった中国人が観光を通じて、日本を好きになった事例は私の周りの友人も経験している。2015 年頃に中国人観光客による「爆買い現象」が流行語になり、その実態を調べようと、銀座や浅草などでゼミ生たちは中国人訪問者の観光行動の調査を始めた。活動は 2019 年まで続き、毎年 5,000~6,000 人へアンケートを実施し、約 500 人の観光客から有効回答を得て、

マイクロデータをゼミ研究に活かした。

私がせっかくの研究成果を地方の活性化に活かさないかと思った時期に、たまたま出会った銚子信用金庫の理事長から誘われ、銚子市のインバウンド調査研究のゼミ活動がスタートした。約 2 年間を経て、2020 年初めに中国人観光客の特徴を生かしたインバウンドの誘致プランと日本人観光客から見た銚子の観光課題などに関する銚子の活性化報告書をまとめた。そして、さらなるご縁があり、ゼミ活動は鹿児島県指宿市を対象に、コロナ禍の来訪者の観光行動や特産品の認知度向上などの調査研究活動を行うようになった。



ゼミ生と銚子にて(最左が唐成さん)

こうしたゼミ生たちの努力によって、唐ゼミは「ガチゼミ」と呼ばれるようになり、毎年学部のプレゼン大会で準優勝以上、特に近年では連続優勝を獲得し続けてきた。ゼミ生たちは自信を持ち、更にはその経験は就活にも活かされている。彼らが今後、社会でますます活躍していくことが私にとって何よりのやりがいである。

2021 年は来日 30 年という節目で、自分の「けじめ」に『家計・企業の金融行動から見た中国経済—「高貯蓄率」と「過剰債務」のメカニズムの解明』(有斐閣)を上梓した。同時に私の日本生活を支えてくれた皆さま、特にずっと親交させて頂き、このような半生記を書く機会を頂いた坂口国際育英奨学財団に深い感謝の意を申し上げたい。



財団に献本された唐成さんの著作

以上